

こんにちは！ 室長の工藤です。

今回は、「青森」という地名に関する話題を一つ。

「青森」という地名は、青々と茂った「小高い森」に由来するといわれています（『青森市の歴史』1989年など）。実際、藩政時代の記録にも「高サ一丈余（約3メートル）之森有之」とあるので、これを「小高い森」と解釈するのは妥当だと思います。

ただ、ここで少し気になるのは「森」を一般的にイメージする「木がたくさん生い茂っている所」（『岩波国語辞典』）と理解していいかどうかという点にあります。つまり、このような意味での「森」を「小高い（高サ一丈余）」という「高さ」で表現するのでしょうか。むしろ、「小さな森」というように「広さ」で表現するのが通常ではないのでしょうか。もちろん、ここでの表現を「小さな森」としてしまうと、史料の解釈としては間違いですが。

では、「森」にほかの意味はないのでしょうか。そこで、『日本国語大辞典』第2版を繰ってみると、津軽地方の方言として「土地の小高い丘」という意味を載せています。典拠は、『青森県方言訛語』という本です。残念ながらこの本を確認することはできませんでしたが、菅沼貴一編『青森県方言集』（1935年初版）によりますと、南部地方では「丘」をモリといい、津軽でも「土の小高いところ」をモリコと言うとありました。なるほど、「森」を「丘」の意味で解釈すると、「小高い」という「高さ」で形容しても違和感はありません。

ただ、「丘」の意味を持つ「森」が、藩政時代まで遡ることができるかという問題がつぎに出てきます。膨大な藩政時代の史料を読んでいくのは大変なことですが、手掛かりが一つあります。

明治42年（1909）に刊行された『青森市沿革史』の著者である葛西音弥^{かさいおとや}は、この「高サ一丈余之森有之」の記録を読んでいる可能性が極めて高く、そして「森」を「小丘（ちいさい丘）」と解釈しています。葛西は天保10年（1839）生まれの弘前藩士で、藩校稽古館の教師を務めた人物です。その彼が「森」を「小丘」と解釈しているのですから、藩政時代の津軽地方で「森」は「丘」という意味も持っていたという蓋然性は高いと思います。



葛西音弥先生碑(合浦公園)

また、藩政時代以来の「青森」の地名の由来（伝承）については、「青森縁起」という名称で一般に知られていたようです。ところが、これが葛西によって大きく書き換えられることになりました。「青森」を「青い丘」と解釈したという点は学ぶべきところではありますが、歴史的な背景を持たないままに伝承を書き換えてしまい、しかもそれが現在の「通説」的な理解になっている点は少々残念なところ です。